

## 島田先生の思ひ出（目次タイトル：島田先生の思出）

著者	内野 台嶺
雑誌名	漢文學會々報
巻	7
ページ	88-89
発行年	1938-03-17
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00146846">http://doi.org/10.15068/00146846</a>

## 島田先生の思ひ出

内野台嶺

島田先生と私との接觸は、昭和四年から始まる。それは先生が御病氣の爲、一高への御出勤が困難となり、其の代りとして、同年一月から暫く私が一高に職を奉ずるやうになつたからである。

其の後先生には、御病氣が御回復になり、文理科大學の創設と共に、漢文學部の教授として來られたので、當時高師教授であつた私は、自然先生と顔を合せることが多くなり、何かとお教へを受ける機會も出來たのであつた。其の後先生が御退官となるや、私は先生の御推輓もあつて、文理科の方へ轉ずることになり、以て今日に及んでゐる。

その間又教員檢定委員として、同じ仕事に携はり、愈々先生とは深い交渉を有つやうになつたわけである。にも係らず何か先生の思出を書かうとすると、誠に書くべき事柄がないのである。此の書くべき事柄がないといふのは、畢竟先生

が、酒も飲まず煙草も吸はず、謹直一方の方で在らせられて所謂傑作とか失敗とか云つたやうな逸話を、一切残されなかつたからであらう。道路を歩かれる場合にも、椅子に腰かけられる場合にも、將又疊の上に寛いで坐られる場合にも、當に上體を眞直にして威儀を整へて居られる。その極めて謹厳且つ上品な先生の御容姿が、只眼の前に浮ぶだけで、それ以外書き誌すべき何物も頭に浮んで來ないのである。

先生の御學問も御修養も、亦此の端嚴な御容姿と同様、誠に他の批判を許さない崇高なものであつた。従つて其の御發表遊ばされた論文などを拜見致すと、如何にも先生の御人格のやうな、品のよい、そして冗のない、謹嚴そのものゝやうな文章に接するのである。

而も先生の御好學は、年と共に其の度を加へ、殊に先生の御晩年は、一層其の感を深くするものがあつた。但悲しいこ

とは、數年前顔面神經痛を病んで以來、發音に明瞭を缺くやうになられ、學校の教室に於ても、檢定の口述試験に於ても、學生や受験生に十分聞き取れないやうな場合が漸く多くなつたことだつた。おまけに絶えず咳嗽に苦しまれ、講義中でも、時折ボケツトからセキ止飴などを出して、しやぶつて居られたが、今でも猶、罐の中から窻かに飴玉を取出して居られるそのお姿が、眼の前にもちらつてならぬのである。

自分が先生と最後にお會ひしたのは、十一月の二十二日であつた。丁度檢定本試験の問題を校正することになり、電話で先生とお打合せをして、同日午前十時に文部省に出頭し、互に讀合せなどして校正を濟ませたのであつたが、今にしてこれを思へば、此の日先生には、いつもと違つて、何だか校正することが非常に煩冗さうな御様子だつた。そして日本劇場に行く路順などを尋ねられるので、何か劇場の催し物見物に行かれるので、斯くお急ぎになるのだらう位に考へて、別に其の時は何とも思はずお別れしたのであつたが、實は其の時既に、死といふ眼に見えない大きな力が、先生の御身體に徐々に薄りつゝあつたのかも知れない。そして其の後は先生にお眼にかゝる機會もなく、翌月十三日には、遂に不歸の客

となつてしまはれたのであつた。

先生古稀のお祝に撮影されたお寫眞は、今でも漢文研究室に高く掲げられ、學生の勉學の様子を不斷に見つめて居られるが、漢文學會の宴會等に必ず出席され、一場の教訓を賜はつたあの氣品のある先生の聲咳には、永久に接することが出来なくなつてしまつたのだ。このことは獨り文理科大學漢文學部の一大不幸であるばかりでなく、廣く我が國漢文學界にとつても、亦大いなる損失と云はねばならない。

(二月二十二日)